

30.08.2004

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

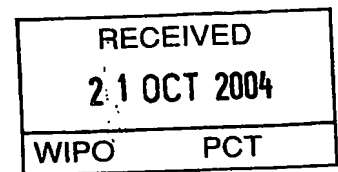
別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2003年 8月 6日

出願番号
Application Number: 特願2003-287407
[ST. 10/C]: [JP2003-287407]

出願人
Applicant(s): 日本化薬株式会社



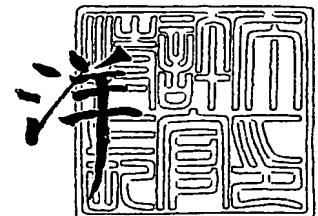
BEST AVAILABLE COPY

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年10月 7日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

小川



【書類名】 特許願
【整理番号】 30806021
【提出日】 平成15年 8月 6日
【あて先】 特許庁長官 殿
【国際特許分類】 B60R 21/26
【発明者】
 【住所又は居所】 兵庫県姫路市豊富町豊富 3 9 0 3 - 3 9 日本化薬株式会社 姫
 路工場内
 【氏名】 斎藤 哲雄
【発明者】
 【住所又は居所】 兵庫県姫路市豊富町豊富 3 9 0 3 - 3 9 日本化薬株式会社 姫
 路工場内
 【氏名】 道斉 隆義
【発明者】
 【住所又は居所】 兵庫県姫路市豊富町豊富 3 9 0 3 - 3 9 日本化薬株式会社 姫
 路工場内
 【氏名】 末廣 昭彦
【発明者】
 【住所又は居所】 兵庫県赤穂市正保橋町 6 - 3 0
 【氏名】 真殿 章吾
【特許出願人】
 【識別番号】 000004086
 【氏名又は名称】 日本化薬株式会社
【代理人】
 【識別番号】 100089196
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 梶 良之
【選任した代理人】
 【識別番号】 100104226
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 須原 誠
【手数料の表示】
 【予納台帳番号】 014731
 【納付金額】 21,000円
【提出物件の目録】
 【物件名】 特許請求の範囲 1
 【物件名】 明細書 1
 【物件名】 図面 1
 【物件名】 要約書 1
 【包括委任状番号】 0308669
 【包括委任状番号】 0000588

【書類名】特許請求の範囲**【請求項 1】**

イニシエータシェル (1) とクロージャシェル (2) とで形成される金属製のハウジング (3) と、

前記ハウジング (3) 内に形成され、燃焼により高温ガスを発生するガス発生剤 (4) が装填された燃焼室 (5) と、

前記燃焼室 (5) の周囲に配置されたフィルタ部材 (6) と、

前記ハウジング (3) に装着され前記燃焼室 (5) 内の前記ガス発生剤 (4) を着火燃焼させる点火手段 (7) と、

前記ハウジング (3) に形成され、前記燃焼室 (5) で発生したガスを放出する複数のガス放出孔 (8) を有してなるガス発生器 (A1) であって、

前記ハウジング (3) を形成するイニシエータシェル (1) とクロージャシェル (2) のいずれか一方又は両方が、半球形状又は半楕円球形状の鏡板部 (14, 10) と前記鏡板部 (14, 10) から連続して形成される直径 D の筒部 (13, 9) を有し、前記筒部 (13, 9) の直径 D と前記イニシエータシェル (1) とクロージャシェル (2) の各鏡板部 (14, 10) の底部間距離 H との比 H/D の範囲が、 $0.4 \sim 1.3$ であり、前記ガス放出孔 (8) の開口面積の総和 (A_t) に対するガス発生剤 (4) の表面積の総和 (A) の比率 (A/A_t) が 1300 を超え、2000 以下であるガス発生器。

【請求項 2】

前記ガス放出孔 (8) の孔径が 2 種類以上である請求項 1 に記載のガス発生器。

【請求項 3】

前記ガス放出孔 (8) が、1 列又は複数列に配列されている請求項 1 又は 2 に記載のガス発生器。

【請求項 4】

前記ガス放出孔 (8) が、大小 2 種類の孔径で、2 列にジグザグ状に配列されてなり、前記ガス放出孔 (8) の小孔径 (D_1) / 大孔径 (D_2) の関係が、 $0.1 \sim 1.0$ である請求項 1 ~ 3 のいずれかに記載のガス発生器。

【請求項 5】

前記ガス放出孔 (8a, 8b) が 2 列にジグザグ状に配列している場合において、各ガス放出孔 (8a, 8b) の前記ハウジング (3) の軸方向の孔間距離 d が、(小孔径 (D_1) + 大孔径 (D_2)) / 2 以上である請求項 4 に記載のガス発生器。

【請求項 6】

前記ガス放出孔 (8) はラプチャー部材 (11) によって塞がれており、前記ラプチャー部材 (11) が、アルミニウム、鋼、ステンレスのいずれかからなる金属製の板材である請求項 1 ~ 5 のいずれかに記載のガス発生器。

【請求項 7】

前記ラプチャー部材 (11) の厚みが、 $0.01 \sim 0.3 \text{ mm}$ である請求項 6 に記載のガス発生器。

【請求項 8】

前記ラプチャー部材 (11) は、前記ガス放出孔 (8) の孔径に応じて、その強度が異なるように設けられ、前記ガス放出孔 (8) の孔径の小さいものほど前記ラプチャー部材 (11) の強度が高くなるように設けられている請求項 1 乃至 7 のいずれかに記載のガス発生器。

【請求項 9】

異なる孔径のガス放出孔 (8a, 8b) に設けられている前記ラプチャー部材 (11) の強度が、前記ガス放出孔 (8a, 8b) の小孔径 D_1 / 大孔径 D_2 で $2 \sim 8$ となるように調整されて前記ガス放出孔 (8a, 8b) に貼付されている請求項 1 乃至 8 のいずれかに記載のガス発生器。

【書類名】明細書

【発明の名称】ガス発生器

【技術分野】

【0001】

本発明は、エアバッグ等を膨張させるのに好適なガス発生器に関する。

【背景技術】

【0002】

自動車の衝突時に生じる衝撃から乗員を保護するため、急速にエアバッグを膨張展開させるガス発生器は、ステアリングホイール内やインストルメントパネル内に装着されたエアバッグモジュールに組み込まれている。そして、ガス発生器は、コントロールユニット（作動器）からの通電によって点火器（スクイブ）を発火させ、この火炎によりガス発生剤を燃焼させて、多量のガスを急激に発生させるものである。

【0003】

従来のガス発生器としては、ガス発生剤の点火室に相当する中央空間部と、その外部に同心状に形成され、ガスの燃焼・冷却・スラグ捕集を行う燃焼・フィルタ室に相当する環状空間部とを有するいわゆる2筒式のガス発生器がある。この種のガス発生器としては、例えば、特許文献1に開示されているものがある。このガス発生器は、図4に示すように、ガス発生器のハウジングとして、2筒構造の上容器51と、2重短管構造の下容器54とを突き合わせて摩擦溶接することにより得られるハウジング構造の中央空間部を点火室Pとし、その周囲の環状空間部を燃焼室G、フィルタ室Fとする。点火室Pには、下方からスクイブ68、伝火薬69が内装される。一方、燃焼室G、フィルタ室Fには、断面が両フランジのある凹形のリング状蓋部材66を、各フランジ66d、66eがそれぞれ、上容器51のバリ52b、53bに当接して固定し、この蓋部材66と上容器51とで挟まれた環状空間にガス発生剤57、冷却・スラグ捕集部材60を径方向に順に収納することにより、燃焼室G、フィルタ室Fを形成している。また、ガス発生剤57の層の上面70及び下面71には、それぞれ、リング状のクッション部材58、59を介装している。また、冷却・スラグ捕集部材60の上面及び下面にはそれぞれ、シール部材61及び62を介装している。さらに、ガス放出用オリフィス53aを塞ぐようなアルミ箔64及び伝火用オリフィス52aを塞ぐようなアルミ箔65を貼り付けたものである。このような構成にすることで、ガス発生室G内で発生したガスによる内圧の上昇に十分に耐え得るガス発生器が得られている。

【特許文献1】特開平9-207705号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

しかしながら、この種の2筒式ガス発生器の場合、図4に示すように、ガス発生器を構成する部品点数が多く、また、構造も複雑化していた。このため、ガス発生器の安全性を維持しつつ、製造コストを低減するにもある程度の限度があった。

【0005】

本発明は、ガス発生器の構造を簡易化できると共に、構成部品点数を少なくした場合であっても、ガス発生器の高い安全性を維持でき得るガス発生器を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

前記課題を解決するための本発明のガス発生器は、イニシエータシェルとクロージャシエルとで形成される金属製のハウジングと、前記ハウジング内に形成され、燃焼により高温ガスを発生するガス発生剤が装填された燃焼室と、前記燃焼室の周囲に配置されたフィルタ部材と、前記ハウジングに装着され前記燃焼室内の前記ガス発生剤を着火燃焼させる点火手段と、前記ハウジングに形成され、前記燃焼室で発生したガスを放出する複数のガス放出孔を有してなるガス発生器であって、前記ハウジングを形成するイニシエータシェ

ルとクロージャシエルのいずれか一方又は両方が、半球形状又は半楕円球形状の鏡板部と前記鏡板部から連続して形成される直径Dの筒部を有し、前記筒部の直径Dと前記イニシエータシエルとクロージャシエルの各鏡板部の底部間距離Hとの比 H/D の範囲が、0.4～1.3であり、前記ガス放出孔の開口面積の総和(A_t)に対するガス発生剤の表面積の総和(A)の比率(A/A_t)が1300を超え、2000以下である。また、前記ガス放出孔の孔径が2種類以上であるものである。また、前記ガス放出孔が、1列又は複数列に配列されているものである。また、前記ガス放出孔が、大小2種類の孔径で、2列にジグザグ状に配列されてなり、前記ガス放出孔の小孔径(D_1)/大孔径(D_2)の関係が、0.1～1.0であるものである。また、前記ガス放出孔が2列にジグザグ状に配列している場合において、各ガス放出孔の前記ハウジングの軸方向の孔間距離dが、(小孔径(D_1)+大孔径(D_2))/2以上であるものである。前記ガス放出孔はラプチャー部材によって塞がれており、前記ラプチャー部材が、金属製の板であるものである。また、前記ラプチャー部材の厚みが、0.01～0.3mmであるものである。また、前記ラプチャー部材は、前記ガス放出孔の孔径に応じて、その強度が異なるように設けられ、前記ガス放出孔の孔径の小さいものほど前記ラプチャー部材の強度が高くなるように設けられているものである。また、異なる孔径のガス放出孔に設けられている前記ラプチャー部材の強度が、前記ガス放出孔の小孔径 D_1 /大孔径 D_2 で2～8となるように調整されて前記ガス放出孔に貼付されているものである。

【発明の効果】

【0007】

部品点数が少なく、簡易な構造であっても、燃焼室内でガス発生剤の燃焼により発生したガスによって、ハウジング内の圧力が高まった場合であっても、ハウジングの変形を抑制することができる。また、部品点数を少なくでき、簡易な構造とできるため、ガス発生器の小型化、製造コストの大幅な低減が可能となる。また、複数のガス放出孔を設けることによって、燃焼室から放出される高温ガスを安定して供給することができる。さらに、これら複数のガス放出孔の孔径に合わせて、これらガス放出孔を塞ぐラプチャー部材の強度を調整することによって、これら各温度で開放されるガス放出孔を制御することができ、温度差による性能差を小さくすることができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【0008】

以下、図面を参照しつつ、本発明に係るガス発生器の実施形態例について説明する。

【0009】

図1に本発明に係るガス発生器の実施形態の一例であるガス発生器A1の断面図を示す。図1において、ガス発生器A1は、エアバッグを膨張展開させるもので、イニシエータシエル1とクロージャシエル2とからなる略球形状のハウジング3と、このハウジング3内に形成され、燃焼により高温ガスを発生するガス発生剤4が装填された燃焼室5と、燃焼室5の周囲に配置されたフィルタ部材6と、ハウジング3に装着され、燃焼室5内のガス発生剤4を着火燃焼させる点火手段7と、で構成されている。イニシエータシエル1は、鉄、ステンレス、アルミニウム、鋼材等の金属製のものでできている。

【0010】

クロージャシエル2は、直径Dの筒部9と、筒部9から連続して形成される半球形状の鏡板部10と、筒部9から径外方に延びるフランジ部12とで構成されている。イニシエータシエル1及びクロージャシエル2の肉厚は、1.5mm～3mmの範囲が好ましい。

また、イニシエータシエル1とクロージャシエル2とが接合されて形成されるハウジング3は、イニシエータシエル1とクロージャシエル2の各鏡板部14、10の底部間距離Hと、筒部9、13の直径Dとの比 H/D が、通常0.4～1.3、好ましくは0.6～1.3である。上記比 H/D が0.4未満の場合、構造上、ガス発生器の組立ができなくなる虞があり、1.3を越える場合、シリンダー型のガス発生器の構造に近づいてしまう。よって、このような範囲とすることで、ガス発生器を小型化できるとともに、燃焼室5内で発生するガスによる圧力にも十分に耐え得る強度を持たせることができる。

【0011】

筒部 9 には、複数のガス放出孔 8 が、その周囲にジグザグに形成されている（図 2 参照）ことが好ましく、2 列にジグザグに形成されていることが好ましい。ガス放出孔 8 が、ジグザグに形成されることで、ハウジング 3 内で発生したガスが、集中することなく放出されるため、フィルタ部材 6 の損傷を抑制する。また、フィルタ部材 6 を広い範囲で利用することができ、フィルタ部材 6 を効率良く利用することができる。これら、ガス放出孔 8 は、ジグザグに形成される以外にも、例えば、1 列に形成されていても良く、2 列、3 列等の複数列形成することで、同様の効果を得ることもできる。

【0012】

また、これらガス放出孔 8 は、その開口面積の総和（ A_t ）に対するガス発生剤 4 の表面積の総和（ A ）の比率（ A/A_t ）が、通常 1300 を超え、2000 以下である。比率（ A/A_t ）が、上記範囲外の場合、用いるガス発生剤が燃焼しにくいことがあり、また、2000 を越える場合は、ガス発生器の強度、コスト、重量が増えるので、ガス発生器の製造面等において不利である。そして、常温、高温、低温時の各温度域において、ガス発生剤の安定化を図る為に、これらガス放出孔 8 としては、異なる孔径を複数設ける必要がある。その口径は 2 種類以上であることが好ましい。

【0013】

本実施形態例におけるガス放出孔 8 は、大小 2 種類の孔径で、2 列にジグザグ状に配列されている。これらガス放出孔 8 の小孔 8 a の小孔径（ D_1 ）と、大孔 8 b の大孔径（ D_2 ）の関係は、小孔径（ D_1 ）／大孔径（ D_2 ）が 0.1～1.0、好ましくは 0.2～0.8、さらに好ましくは 0.3～0.6 であることが好ましい。ガス放出孔 8 a、8 b の関係をこのような関係とすることによって、各温度域において、安定したガス発生を行うことができる。

【0014】

また、本実施形態例において、ガス放出孔 8 a、8 b は、ハウジング 3 の軸方向の孔間距離 d （後記の図 2 に記載の d のこと）が、（小孔径（ D_1 ）＋大孔径（ D_2 ））／2 以上であることが好ましい。これによって、前述したように、ハウジング 3 内で発生したガスが、集中することなく放出されるため、フィルタ部材 6 の損傷を確実に抑制する。また、フィルタ部材 6 を広い範囲で利用することができ、フィルタ部材 6 をより一層、効率良く利用することができる。

【0015】

また、これらガス放出孔 8 a、8 b は、筒部 9 の内周部に貼り付けられた帯状のアルミニウム、鋼、ステンレス等の帯状テープのラプチャー部材 11 によって、燃焼室 5 内を密封している。この筒部 9 の長さ h は 5 mm 以上が好ましく、5～30 mm がより好ましく、10～30 mm が特に好ましい。これによって、ラプチャー部材 11 として帯状テープを用いることができると共に、ラプチャー部材 11 を容易に且つ確実に貼り付けることができるからである。

【0016】

そして、このラプチャー部材 11 は、厚みが 0.01～0.3 mm であることが好ましい。また、ガス放出孔 8 a、8 b の孔径に応じて、その強度が異なるように設けられている。具体的には、ガス放出孔 8 の孔径の小さいものほどラプチャー部材 11 の強度が高くなるように設けることが好ましい。そして、このときのラプチャー部材 11 の強度は、ガス放出孔 8 a、8 b の孔径の比率で示した場合、小孔径 D_1 ／大孔径 D_2 で 2～8、好ましくは 2.5～7、さらに好ましくは 3～5 となるようにすることが好ましい。このように、ラプチャー部材 11 の強度を各ガス放出孔 8 a、8 b の孔径に応じて調整されて貼付することによって、各温度域において、ガス発生剤の性能差を小さくすることが可能となる。

【0017】

鏡板部 10 の短軸 d_1 と長軸 d_2 との比 d_1/d_2 （図 3 参照）の範囲は 1～0.02 であり、より好ましくは 1～0.1 である。このような範囲内とすることによって、ガス発生器内で発生したガスによる内圧にも十分耐え得ることができる。また、鏡板部 10 は、曲

率半径 R の半球形状をし、筒部 9 の直径 D との比 D/R の範囲が $0.3 \sim 2$ であることが好ましい。より好ましい範囲は、 $0.9 \sim 2$ である。これによって、ガス発生器を小型化することが可能となる。このように、鏡板部を半球形状または半楕円球形状とすることによって、燃焼室 5 で発生するガスのガス圧力が集中する部分をなくすることができる。このため、ガス発生器の構成部品点数を少なくし、構造を簡易なものとした場合であっても、ガス発生時にハウジングの変形を極めて小さくすることができる。

【0018】

このクロージャシエル 2 に圧接、溶接等によって接合されるイニシエータシエル 1 は、前述のクロージャシエル 2 と同様、筒部 13 と、筒部 13 から連続して形成される半球形状の鏡板部 14 とで構成されている。そして、鏡板部 14 の中心部には、点火手段 7 が設けられている。

【0019】

このイニシエータシエル 1 の鏡板部 14 も、前述のクロージャシエル 2 の鏡板部 10 と同様に、短軸 d_1 と長軸 d_2 との比 d_1/d_2 の範囲が $1 \sim 0.02$ である。より好ましい範囲は $1 \sim 0.1$ である。これによって、イニシエータシエル 1 とクロージャシエル 2 とが、接合されて一体となったときに、略球形状あるいは略楕円球形状のハウジング 3 を形成することができる。

【0020】

鏡板部 14 の中心部に設けられている点火手段 7 は、周囲に複数の伝火孔 15 を有する有底の内筒体 16 と、この内筒体 16 内に装填された伝火剤 17 と、この伝火剤 17 に接するように設けられた点火器 18 とで構成されている。

【0021】

内筒体 16 は、点火手段保持部 19 にカシメ固定等の任意の方法で固定されている。そして、内筒体 16 は、点火手段保持部 19 が鏡板部 14 に溶接等の任意の方法で固定されることで、イニシエータシエル 1 に固定されている。また、この内筒体 16 は、ハウジング 3 内に形成されている燃焼室 5 の一端側から、燃焼室 5 の略中心に至る長筒状となっている。そして、その周囲には、複数の伝火孔 15 が、内筒体 16 の軸方向に沿って長孔状に形成されている。これら伝火孔 15 は、内筒体 16 の軸方向に沿って相隣り合うもの同士が、図 1 に示すように並設されないようにジグザグに形成されている。このため、この点火手段 7 から噴出する熱流は、燃焼室 5 内全体に効率良く噴出される。なお、これら伝火孔 15 は、長孔状でなくてもよく、丸孔であっても良い。また、ジグザグに形成されていなくてもよい。

【0022】

これら、クロージャシエル 2 とイニシエータシエル 1 とで構成されるハウジング 3 内には、筒部 9、13 の内壁に沿って、燃焼室 5 の周囲に配置されたフィルタ部材 6 が設けられている。フィルタ部材 6 は、例えば、メリヤス編み金網、平織金網、クリンプ織り金属線材或いは巻き金属線材の集合体を円環状に成形することによって安価に製作される。このフィルタ部材 6 は、クロージャシエル 2 及びイニシエータシエル 1 の鏡板部 10、14 の内面にそれぞれ設けられている押え部材 20、21 によって、ハウジング 3 の内壁側に押えられている。

【0023】

フィルタ部材 6 の内周部には、ガス発生剤 4 が装填されている。そして、これらガス発生剤 4 が、点火手段 7 からの熱流によって燃焼する燃焼室 5 となっている。

【0024】

燃焼室 5 内に装填されているガス発生剤 4 は、非アジド系組成物であって、例えば、燃料と、酸化剤と、添加剤（バインダ、スラグ形成剤、燃焼調整剤）とで構成されるものを使用することができる。

【0025】

燃料としては、例えば含窒素化合物が挙げられる。含窒素化合物としては、例えば、トリアゾール誘導体、テトラゾール誘導体、グアニジン誘導体、アゾジカルボンアミド誘導

体、ヒドラジン誘導体、ウレア誘導体、アンミン錯体から選ばれる 1 種又は 2 種以上の混合物を挙げることができる。

【0026】

トリアゾール誘導体の具体例としては、例えば、5-オキソ-1, 2, 4-トリアゾール、アミノトリアゾール等を挙げることができる。テトラゾール誘導体の具体例としては、例えば、テトラゾール、5-アミノテトラゾール、硝酸アミノテトラゾール、ニトロアミノテトラゾール、5, 5'-ビー-1H-テトラゾール、5, 5'-ビー-1H-テトラゾールジアンモニウム塩、5, 5'-アゾテトラゾールジグアニジウム塩等が挙げられる。グアニジン誘導体の具体例としては、例えば、グアニジン、ニトログアニジン、シアノグアニジン、トリアミノグアニジン硝酸塩、硝酸グアニジン、硝酸アミノグアニジン、炭酸グアニジン等が挙げられる。アゾジカルボンアミド誘導体の具体例としては、例えば、アゾジカルボンアミド等が挙げられる。ヒドラジン誘導体の具体例としては、例えば、カルボヒドラジド、カルボヒドラジド硝酸塩錯体、蔞酸ジヒドラジド、ヒドラジン硝酸塩錯体等が挙げられる。ウレア誘導体としては、例えば、ビウレットが挙げられる。アンミン錯体としては、例えば、ヘキサアンミン銅錯体、ヘキサアンミンコバルト錯体、テトラアンミン銅錯体、テトラアンミン亜鉛錯体等が挙げられる。

【0027】

これらの含窒素化合物の中でもテトラゾール誘導体及びグアニジン誘導体から選ばれる 1 種又は 2 種以上が好ましく、特にニトログアニジン、硝酸グアニジン、シアノグアニジン、5-アミノテトラゾール、硝酸アミノグアニジン、炭酸グアニジンが好ましい。

【0028】

ガス発生剤 4 中におけるこれら含窒素化合物の配合割合は、分子式中の炭素原子、水素原子及びその他の酸化される原子の数によって異なるが、通常 20~70 重量%の範囲が好ましく、30~60 重量%の範囲が特に好ましい。また、ガス発生剤に添加される酸化剤の種類により、含窒素化合物の配合割合の絶対数値は異なる。しかしながら、含窒素化合物の配合割合の絶対数値が、完全酸化理論量より多いと発生ガス中の微量 CO 濃度が増大する。一方、含窒素化合物の配合割合の絶対数値が、完全酸化理論量及びそれ以下になると発生ガス中の微量 NO_x 濃度が増大する。従って両者の最適バランスが保たれる範囲が最も好ましい。

【0029】

酸化剤としては、アルカリ金属、アルカリ土類金属、遷移金属、アンモニウムから選ばれたカチオンを含む硝酸塩、亜硝酸塩、過塩素酸塩の少なくとも 1 種から選ばれた酸化剤が好ましい。硝酸塩以外の酸化剤、即ち亜硝酸塩、過塩素酸塩等のエアバッグインフレーション分野で多用されている酸化剤も用いることができるが、硝酸塩に比べて亜硝酸塩分子中の酸素数が減少すること又はバッグ外へ放出されやすい微粉状ミストの生成を減少させる等の観点から硝酸塩が好ましい。硝酸塩としては、例えば硝酸ナトリウム、硝酸カリウム、硝酸マグネシウム、硝酸ストロンチウム、相安定化硝酸アンモニウム、塩基性硝酸銅等を挙げることができ、硝酸ストロンチウム、相安定化硝酸アンモニウム、塩基性硝酸銅がより好ましい。

【0030】

ガス発生剤 4 中の酸化剤の配合割合は、用いられる含窒素化合物の種類と量により絶対数値は異なるが、30~80 重量%の範囲が好ましく、特に上記の CO 及び NO_x 濃度に関連して 40~75 重量%の範囲が好ましい。

【0031】

添加剤であるバインダは、ガス発生剤の燃焼挙動に大幅な悪影響を与えないものであれば何れでも使用可能である。バインダとしては、例えば、カルボキシメチルセルロースの金属塩、メチルセルロース、ヒドロキシエチルセルロース、酢酸セルロース、プロピオン酸セルロース、酢酸酪酸セルロース、ニトロセルロース、微結晶性セルロース、グアガム、ポリビニルアルコール、ポリアクリルアミド、澱粉等の多糖誘導体、ステアリン酸塩等の有機バインダ、二硫化モリブデン、合成ヒドロキシタルサイト、酸性白土、タルク、ベ

ントナイト、ケイソウ土、カオリン、シリカ、アルミナ等の無機バインダを挙げることができる。

【0032】

バインダの配合割合はプレス成型の場合0～10重量%の範囲が好ましく、押出成型においては2～15重量%の範囲であることが好ましい。添加量が多くなるに従い成型体の破壊強度が強くなる。ところが、組成物中の炭素原子及び水素原子の数が増大し、炭素原子の不完全燃焼生成物である微量COガスの濃度が高くなり、発生ガスの品質が低下する。また、ガス発生剤の燃焼を阻害することから、最低量での使用が好ましい。特に15重量%を超える量では酸化剤の相対的存在割合の増大を必要とし、ガス発生化合物の相対的割合が低下し、実用できるガス発生器システムの成立が困難となる。

【0033】

また、添加剤として、バインダ以外の成分としては、スラグ形成剤を配合することができる。スラグ形成剤は、ガス発生剤中の特に酸化剤成分から発生する金属酸化物との相互作用により、ガス発生器A1内のフィルタ部材6でのろ過を容易にするために添加される。

【0034】

スラグ形成剤としては、例えば、窒化珪素、炭化珪素、酸性白土、シリカ、ペントナイト系、カオリン系等のアルミノケイ酸塩を主成分とする天然に産する粘土、合成マイカ、合成カオリナイト、合成スメクタイト等の人工的粘土、含水マグネシウムケイ酸塩鉱物の一種であるタルク等から選ばれるものを挙げることができ、これらの中でも酸性白土又はシリカが好ましく、特に酸性白土が好ましい。スラグ形成剤の配合割合は0～20重量%の範囲が好ましく、2～10重量%の範囲が特に好ましい。多すぎると線燃焼速度の低下及びガス発生効率の低下をもたらす、少なすぎるとスラグ形成能を十分発揮することができない。

【0035】

ガス発生剤4の好ましい組合せとしては、5-アミノテトラゾール、硝酸ストロンチウム、合成ヒドロタルサイト、及び窒化珪素を含むガス発生剤、または、硝酸グアニジン、硝酸ストロンチウム、塩基性硝酸銅、酸性白土を含むガス発生剤が挙げられる。

【0036】

また、必要に応じて燃焼調整剤を添加してもよい。燃焼調整剤としては金属酸化物、フェロシリコン、活性炭、グラファイト、或いはヘキソゲン、オクトゲン、5-オキソ-3-ニトロ-1, 2, 4-トリアゾールといった化合火薬が使用可能である。燃焼調整剤の配合割合は0～20重量%の範囲が好ましく、2～10重量%の範囲が特に好ましい。多すぎるとガス発生効率の低下をもたらす、また、少なすぎると十分な燃焼速度を得ることができない。

【0037】

以上のような構成によるガス発生剤4は、プレス成型或いは押出成型による成型体が好ましく、より好ましくは押出成型体で、その形状としては、例えば、ペレット状（一般に、医薬品の1つの形状である錠剤の形にあたるもの）、円柱状、筒状、ディスク状又は両端が閉鎖された中空体形状等が挙げられる。筒状には、円筒状が挙げられ、円筒状には単孔円筒状、多孔円筒状が挙げられる。両端が閉鎖された中空体形状には、両端が閉鎖された円筒状が含まれる。なお、ガス発生剤4の成型体の両端が閉鎖された状態とは、両端に開いた孔が外から内への力2つによって閉鎖された状態のことをいう。孔は、完全に塞がった状態でも、塞ぎきれていない状態でもいずれでも良い。

【0038】

この、両端が閉鎖された中空体形状のガス発生剤4の製造方法の一例を説明する。前述した含窒素化合物、酸化剤、スラグ形成剤及びバインダで構成される非アジド系組成物は、まず、V型混合機、またはボールミル等によって混合される。更に水、又は溶媒（例えば、エタノール）を添加しながら混合し、湿った状態の薬塊を得ることができる。ここで、湿った状態とは、ある程度の可塑性を有する状態であり、水又は溶媒を好ましくは10

～25重量%、より好ましくは13～18重量%含有している状態にあるものをいう。この後、この湿った状態の薬塊をそのまま押出成型機（例えば、ダイス及び内孔用ピンを出口に備えたもの）により、外径が、好ましくは1.4mm～4mmで、より好ましくは1.5mm～3.5mmであり、内径が、好ましくは0.3mm～1.2mmであり、より好ましくは0.5mm～1.2mmの中空筒状成型体に押出成型する。その後、押出成型機で押出された中空筒状成型体を一定間隔で押圧して両端が閉鎖された筒状成型体が得られる。通常は、この中空筒状成型体を一定間隔で押圧した後、それぞれ閉鎖された窪み部分で折るようにして切断した後、通常、50～60℃の範囲で4～10時間乾燥し、次いで、通常、105～120℃の範囲で6～10時間乾燥という2段階による乾燥を行うことにより、端部が閉鎖された状態で、内部に空間を有した筒状のガス発生剤を得ることができる。このように得られたガス発生剤の長さは、通常、1.5～8mmの範囲にあり、好ましくは1.5～7mmの範囲にあり、より好ましくは2～6.5mmの範囲にある。

【0039】

また、ガス発生剤4の線燃焼速度は定圧条件下で測定され、経験的に以下のVieilleの式に従う。

$$r = a P^n$$

ここで、 r は線燃焼速度、 a は定数、 P は圧力、 n は圧力指数を示す。この圧力指数 n は、 Y 軸の燃焼速度の対数に対する X 軸の圧力の対数プロットによる勾配を示すものである。

【0040】

本実施形態例に係るガス発生剤に用いられるガス発生剤の好ましい線燃焼速度の範囲は、70kgf/cm²下で3～60mm/秒であり、より好ましくは5～35mm/秒であり、また、好ましい圧力指数の範囲は $n=0.90$ 以下、より好ましくは $n=0.75$ 以下、更に好ましくは $n=0.60$ 以下、特に好ましくは $n=0.60\sim0.30$ である。

【0041】

また、線燃焼速度を測定する方法としては、ストランドバーナ法、小型モータ法、密閉圧力容器法が一般に挙げられる。具体的には所定の大きさにプレス成型した後、表面にリストラクターを塗布することにより得られた試験片を用いて、ヒューズ切断法等により、高圧容器中で燃焼速度を測定する。この時、高圧容器内の圧力を変数に線燃焼速度測定し、上記Vieilleの式から圧力指数を求めることができる。

【0042】

ガス発生剤が、非アジド系ガス発生剤形成されているため、使用される原料は人体有害性の小さいものである。また、燃料成分、酸化剤成分を選択することにより、発生ガスモル当たりの発熱量を抑えることができ、ガス発生剤の小型、軽量化が可能となる。

【0043】

また、内筒体16に装填される伝火剤17としては、一般に用いられている次のような組成物を含むものが用いられる。B/KNO₃に代表される金属粉、酸化剤を含む組成物、含窒素化合物/酸化剤/金属粉を含む組成物、或いは、前述のガス発生剤11と同様の組成物等が挙げられる。含窒素化合物としては、ガス発生剤の燃料成分（アミノテトラゾール、硝酸グアニジン等）として使用可能なものが挙げられる。酸化剤としては、例えば硝酸カリウム、硝酸ナトリウム、硝酸ストロンチウム等の硝酸塩が挙げられる。金属粉としては、例えばホウ素、マグネシウム、アルミニウム、マグネシウム（マグネシウム-アルミニウム合金）、チタン、ジルコニウム、タングステン等が挙げられる。好ましい組合せとしては、5-アミノテトラゾール、硝酸カリウム、ホウ素を含むもの、硝酸グアニジン、硝酸カリウム、ホウ素等を挙げることができる。そして、必要に応じて、ガス発生剤で使用可能な成型用バインダを0～10%重量含んでもよい。

【0044】

また、伝火剤17の形状は、粒状、顆粒状、ペレット状（一般に、医薬品の錠剤の形にあたるもの）、円柱状、筒状又はディスク状等が挙げられる。筒状には、例えば円筒状が

挙げられ、円筒状には、例えば単孔円筒状、多孔円筒状等が挙げられる。製造方法としては、例えば粉末混合、造粒法（攪拌造粒、噴霧乾燥造粒、押出造粒、転動造粒、圧縮造粒等）、打錠成型法等が挙げられる。

【0045】

また、この燃焼室5のクロージャシエル2の鏡板部10側には、クッション部材22が設けられている。これらクッション部材22は、例えば、セラミックスファイバー、発泡シリコン等で形成されており、振動等によって、燃焼室5内に装填されているガス発生剤4の割れ等の破壊を防止している。

【0046】

本発明のガス発生器A1は、1筒式のガス発生器として、主に、自動車の助手席用のエアバッグを膨らませるガス発生器に利用され、各鏡板部14、10の底部間距離Hは、45mm以上、90mm以下の範囲とすることが好ましい。該ガス発生器は、助手席側のインストルメントパネル内に装着されることになるエアバッグモジュールに組み込まれる。そして、ガス発生器A1の点火手段7は、図示省略する車両側コネクタに接続される。なお、運転席側に用いることも可能である。2筒式のガス発生器としてもエアバッグモジュールに組み込むことも可能である。

【0047】

本発明のガス発生器では、ガス発生器を小型軽量化した場合であっても、従来と同様の量のガス発生剤を充填することができ、ガス発生量が少なくなることがない。また、従来と同等のガス発生量を得ることができるにもかかわらず、小型軽量化が可能となるのは、ハウジングに鏡板部14、10が形成されているため、ハウジング内部に圧力の集中する部分がなく、高い圧力にも十分に耐え得ることができ、ガス発生時のハウジングの変形が極めて小さいからである。

【0048】

以上のようにして、自動車に接続されたガス発生器A1は、例えば、衝突センサが自動車の衝突を検出することで、点火手段7に接続されているスクイプ点火回路によって点火手段7が作動（通電発火）して、燃焼室5内のガス発生剤4を燃焼させることで、高温ガスを発生させる。このとき、燃焼室5内は圧力が上昇するが、ハウジング3は略球形状であるため、燃焼室5内での圧力上昇に十分に耐え得る強度を有し、変形は極めて小さい。そして、燃焼室5内で発生した高温ガスは、フィルタ部材6を通過して、ラプチャー部材11を破ってガス放出孔8から放出される。高温ガスがフィルタ部材6を通過する際に、ガスの冷却及び残渣の捕集がなされる。また、フィルタ部材6が、燃焼室5の略全域にわたり設けられているため、フィルタ部材6を有効に利用することができる。このため、十分に冷却されるとともに、残渣が十分に捕集されたガスを放出することが可能となる。

【0049】

さらに、ガス放出孔8が、複数の孔径で形成されるとともに、強度の異なるラプチャー部材で塞がれているため、常温、低温、高温の各温度域で、安定したガス発生特性を示すことができる。

【0050】

参考例1

本発明のガス発生器に使用する両端が閉鎖された中空体形状のガス発生剤の製造例
硝酸グアニジン43.5重量%、硝酸ストロンチウム25重量%、塩基性硝酸銅25重量%、酸性白土2.5重量%、ポリアクリルアミド4重量%の組成で混合した組成物に、エタノール3重量%と、水13重量%を加えて混合、混練し、混練塊にして、出口に内径2mmのダイスと外径0.5mmの内孔用ピンを備えた押出機にて、押出圧8MPaで押出して、押出棒状の成型体を引取りベルトで引取りながら、成型用歯車間に送り出し、成型用歯車の凸歯によって4.4mmの間隔で窪み部分を形成するようにし、その窪み部分で折るようにして切断した後、55℃で8時間乾燥し、次いで110℃で8時間乾燥し、ガス発生剤とした。

【図面の簡単な説明】

【 0 0 5 1 】

【図 1】 本発明の実施形態の一例のガス発生器の断面図である。

【図 2】 本発明の実施形態におけるガス発生器の外観図である。

【図 3】 本発明の実施形態例に係るガス発生器の鏡板部の短軸 d_1 と長軸 d_2 とを説明するための図である。

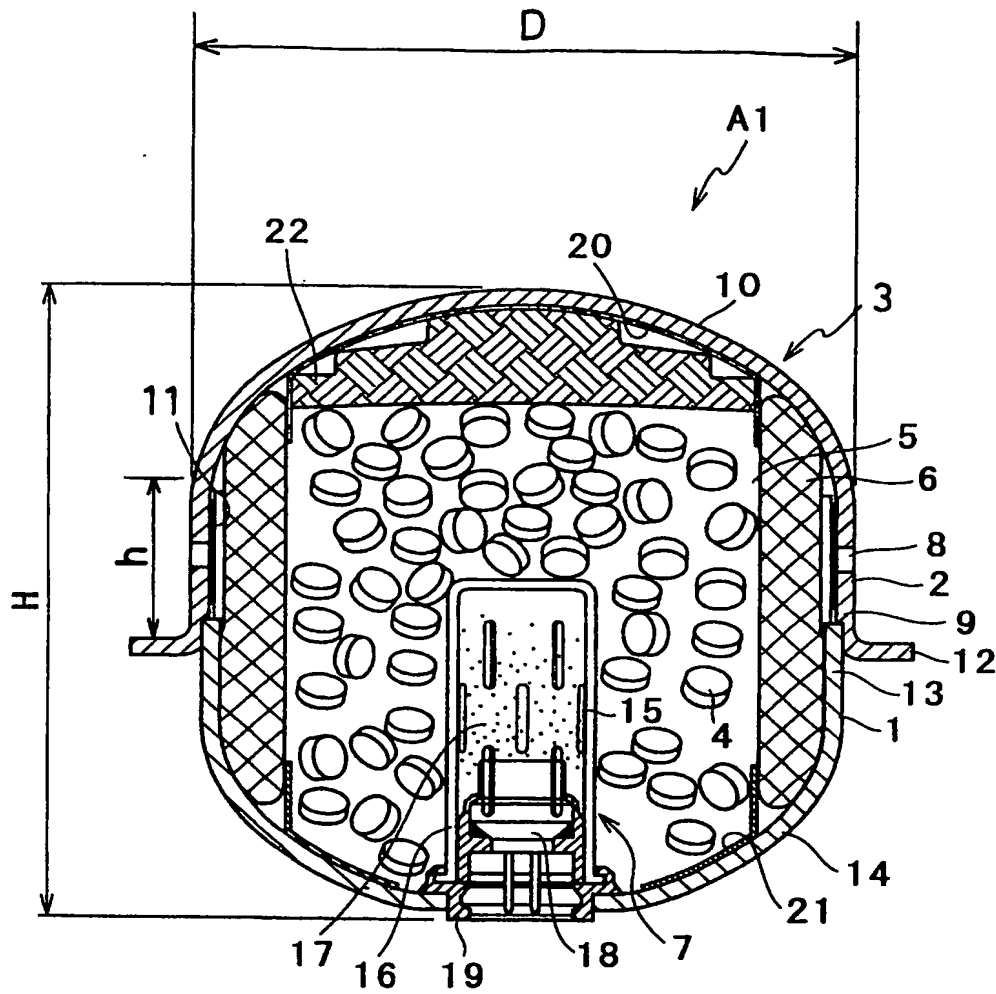
【図 4】 従来の 2 筒式のガス発生器の一例を示す断面図である。

【符号の説明】

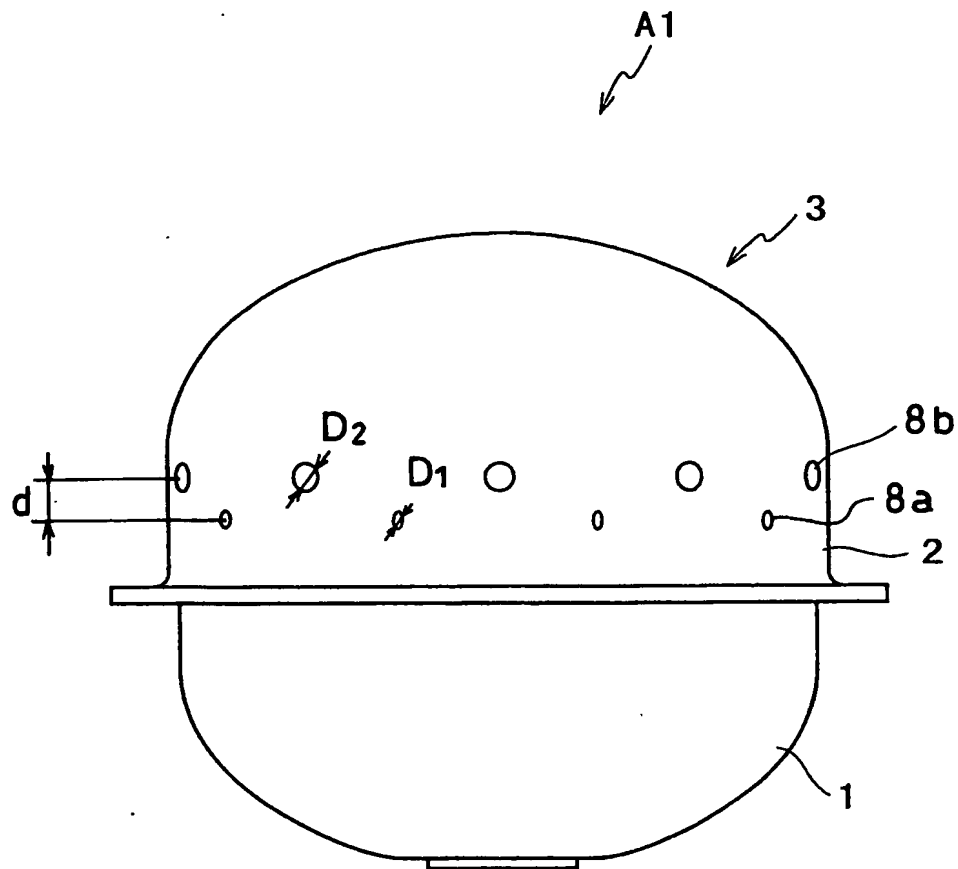
【 0 0 5 2 】

- A 1 ガス発生器
- D 直径
- H 底部間距離
- h 筒部の長さ
- d 孔間距離
- D₁ 小孔径
- D₂ 大孔径
- 1 イニシエータシエル
- 2 クロージャシエル
- 3 ハウジング
- 4 ガス発生剤
- 5 燃焼室
- 6 フィルタ部材
- 7 点火手段
- 8 ガス放出孔
- 8 a 小孔
- 8 b 大孔
- 9 筒部
- 1 0 鏡板部
- 1 1 ラブチャー部材
- 1 2 フランジ部
- 1 3 筒部
- 1 4 鏡板部
- 1 5 伝火孔
- 1 6 内筒体
- 1 7 伝火剤
- 1 8 点火器
- 1 9 点火手段保持部
- 2 0, 2 1 押え部材
- 2 2 クッション部材

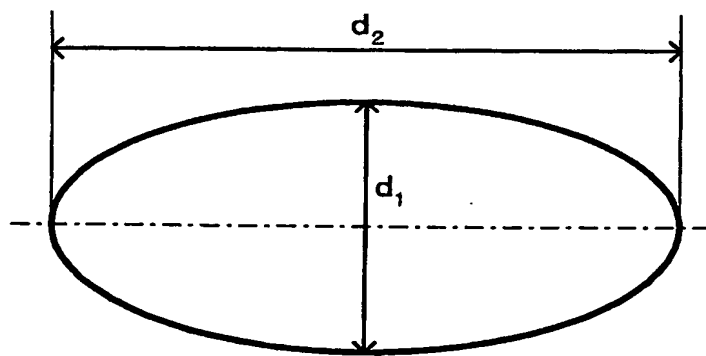
【書類名】 図面
【図 1】



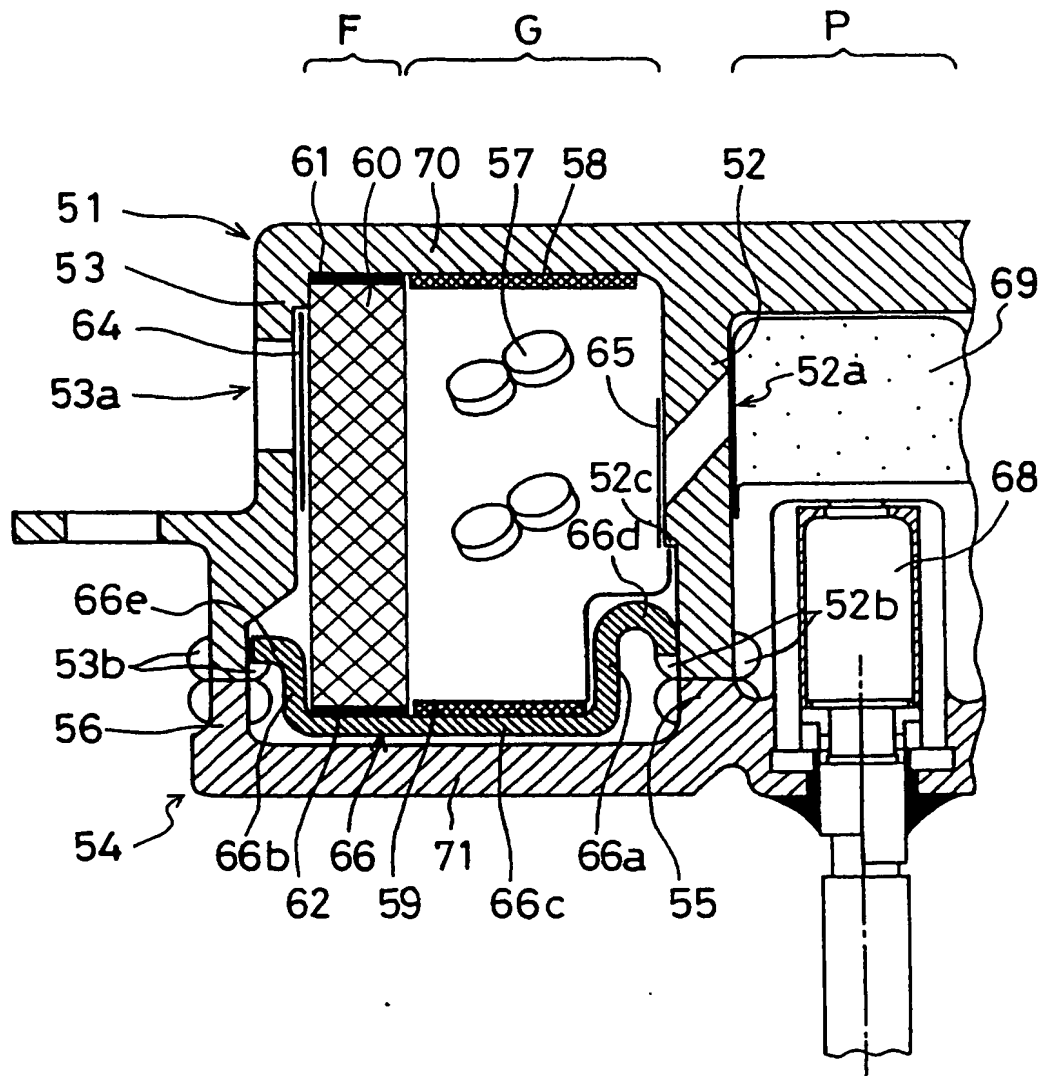
【図 2】



【図 3】



【図 4】



【書類名】要約書

【要約】

【課題】 ガス発生器の構造を簡易化できると共に、構成部品点数を少なくした場合であっても、ガス発生器の高い安全性を維持でき得るガス発生器を提供する。

【解決手段】 イニシエータシェル（１）とクロージャシェル（２）とで形成される金属製のハウジング（３）と、ハウジング（３）内に形成され、燃焼により高温ガスを発生するガス発生剤（４）が装填された燃焼室（５）と、燃焼室（５）の周囲に配置されたフィルタ部材（６）と、ハウジング（３）に装着され燃焼室（５）内のガス発生剤（４）を着火燃焼させる点火手段（７）と、ハウジング（３）に形成され、燃焼室（５）で発生したガスを放出する複数のガス放出孔（８）を有してなるガス発生器（Ａ１）であって、ハウジング（３）を形成するイニシエータシェル（１）とクロージャシェル（２）のいずれか一方又は両方が、半球形状又は半楕円球形状の鏡板部（１４，１０）と鏡板部（１４，１０）から連続して形成される直径Ｄの筒部（１３，９）を有し、筒部（１３，９）の直径Ｄとイニシエータシェル（１）とクロージャシェル（２）の各鏡板部（１４，１０）の底部間距離Ｈとの比 H/D の範囲が、 $0.4 \sim 1.3$ であり、ガス放出孔（８）の開口面積の総和（ A_t ）に対するガス発生剤（４）の表面積の総和（ A ）の比率（ A/A_t ）が 1300 を超え、 2000 以下であることを特徴とする。

【選択図】図２

特願2003-287407

ページ: 1/E

出願人履歴情報

識別番号

[000004086]

1. 変更年月日
[変更理由]

住所
氏名

1990年 8月 9日

新規登録

東京都千代田区富士見1丁目11番2号
日本化薬株式会社